



The Pragmatics Society of Japan  
日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.34 / Autumn 2015

会長 林 宅男

事務局 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学外国語学部 山本英一研究室内

事務局連絡先 [psj.secretary@gmail.com](mailto:psj.secretary@gmail.com)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行【預金種目】当座【店番号】099【口座番号】0130378【口座名】日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 長友俊一郎

日本語用論学会 Newsletter 第 34 号をお届けします。第 18 回大会の概要についてのお知らせがあります。

★副会長メッセージ

<英語のジョーク理解と語用論>

日本語用論学会 副会長 東森 勲

日本語用論学会の会員の皆さまいつもご協力いただき、ありがとうございます。今後とも、一層のご支援よろしく申し上げます。

さて、副会長として、いま一番身近なトピックは昨年より始まった耳の病気によるめまいで、お年寄りを扱った senior jokes です。ジョークと語用論の問題を少し紹介します。

<聞き間違いによるジョーク>

(1) Lost in Translation

Three men who were a little hard of hearing were walking along the street on a blustery day. One said, 'Windy, isn't it?' 'No,' said the second, 'It's Thursday.'

The third man said, 'So am I. Let's have a beer.'  
[Geoff Tibballs (2011) *The Little Book of Senior Jokes*, London: Michael O'Mara Books, pp.50-51]

このジョークは、Windy (風が強い) を耳が悪くて Wednesday (水曜日) と聞き間違え、さらに Thursday (木曜日) を耳が悪くて Thirsty (喉が渴いている) と聞き間違えて、オチで「喉がかわいているから、ビールをのもう」、この「喉がかわ

いているから」の部分が聞き間違いである。聞き間違いと語用論の研究も予想される高齢化社会では新しい研究のトピックと思われる。

<勝手な要約によるジョーク>

(2) A Grim Outlook

A middle-aged woman accompanied her husband on his annual medical check-up. Afterwards the doctor took her to one side and said, 'I'm afraid I have some bad news. Unless you follow a strict routine, your husband will die. Every morning, you must give him a good healthy breakfast and in the evening you must cook him a nutritional meal. You mustn't burden him with any household chores, you must keep the house spotless and you must attend to his every need. I realize it will mean extra work for you, but it really is the only way to keep him alive.'

On their way home, the husband asked his wife what the doctor had said to her. 'Oh,' she replied. 'He said you're going to die.'

[Tibballs (2011) pp.29-30]

このジョークは中年女性のご主人の健康診断のあとに医者からアドバイスされたのは、ご主人が死なないために朝ごはんも健康食を作り、家もほこりのないように掃除し extra work をするようにであった。オチの医者がどういったかというご主人の質問に対し「あなたは死にますと医者が言った」と自分勝手な要約をしている。推意では暗に女性はご主人のために extra work をするつもりはないと言っている。このような自分勝手な要約と語用論の研究も興味深いトピックである。さまざまな興味深いデータがあるが、ここでは 2 例のみ紹介しました。

## \* 日本語用論学会第18回大会ご案内 \*

2015年度の第18回大会は、以下のとおり、名古屋大学での開催となります。会員の皆様のご参加をお待ちしております。なお、変更などがあれば語用論学会のHPで更新していきますので、ご確認ください。

◆日時・場所 2014年12月5日(土)、6日(日)  
名古屋大学  
http://www.nagoya-u.ac.jp/  
名古屋市千種区不老町  
052-789-5111 (代表)

## ◆主なプログラム

≪12月5日(土)≫

9:30 受付開始

10:00~11:40 招聘発表 & ワークショップ

11:50~12:50 ポスター発表 A

13:00~13:20 会員総会

13:30~16:05 研究発表

16:15~17:45 \*基調講演

招聘講演者：ニック・エンフィールド先生  
(シドニー大学)

18:00~20:00 懇親会[南部厚生会館(食堂)]

(一般 4000 円, 学生 3000 円。参加費は大会受付にてお支払いください)

≪12月6日(日)≫

9:00 受付開始

9:30~11:25 研究発表

11:30~11:25 ポスター発表 B

13:00~15:30 \*シンポジウム

15:30~15:40 閉会式 (ND ホール)

## ◆基調講演とシンポジウムの詳細についておよび Pre-conference workshop と Post-conference 公開講演会についてのご案内

## (1) 基調講演

(12月5日(土) 16時15分~17時45分)

題目：「言語使用の普遍性と多様性：語用論的類型論の探求」 招聘講演者：ニック・エンフィールド先生 (シドニー大学)

Plenary Lecture: Universals and diversity in language use: explorations in pragmatic typology  
Professor Nick Enfield (University of Sydney)

講演要旨：

For decades, linguists have made much progress by systematically comparing phonological and morphosyntactic features and subsystems of the

world's languages in an attempt to answer the following two questions. (1) In what ways are all languages the same? (2) In what ways, and to what extent, do languages differ? However, relatively little typological work has addressed universals and diversity in the pragmatic domains of language usage. In this talk I will discuss some new comparative research comparing language usage in very different linguistic and cultural contexts. Case studies from the domains of requests, turn-taking, and other-initiated repair will be presented, with discussion of their implications for the relation between language and cognition.

## (2) 公開シンポジウム

(12月6日(日) 13時~15時30分)

テーマ：「言語間の語用論的プラクティスの異同を比較する：言語人類学、談話分析、コーパス認知言語学、機能主義的類型論の観点から」

司会：堀江薫 (名古屋大学)

講師：ニック・エンフィールド(シドニー大学)、

片岡邦好(愛知大学)、秋田喜美(名古屋大学)

コメンテーター：大堀壽夫(東京大学)

Symposium: "Comparing Pragmatic Practices across Languages: Views from Linguistic Anthropology, Discourse Analysis, Corpus-based Cognitive Linguistics, and Functional Typology"

Chair: Kaoru Horie (Nagoya U.)

Speakers: Nick Enfield (U. of Sydney), Kuniyoshi Kataoka (Aichi U.), Kimi Akita (Nagoya U.)

Commentator: Toshio Ohori (U. of Tokyo)

エンフィールド先生の発表要旨：

'Getting others to do things'. In this talk I will report on a large comparative project focusing on how people get other people to do things in low-cost settings such as kitchens and living rooms, in family and village contexts. This is a report on a major comparative corpus study involving numerous scholars who collected video recording of interaction in diverse cultures. A common coding scheme has yielded some general principles for how requests and similar actions are formulated around the world, with some generalisations and some points of variation. The study develops new methods for comparing pragmatic practices across languages and cultures.

## (3) Pre-conference workshop

(12月4日(金) 17時~19時 @ 名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール)

エンフィールド先生の著書 Relationship Thinking の翻訳 (『やりとりの言語学』大修館書店, 11月出版予定) にちなみ、訳者の横森大輔氏(九州大),

梶丸岳氏(京都市立芸術大), 遠藤智子氏(日本学術振興会 RPD/筑波大), 木本幸憲氏(京都大), エンフィールド先生, 井出祥子氏(日本女子大名誉教授)を交えてワークショップを実施。

Pre-conference workshop featuring the Japanese translation of Prof. Enfield's Relationship Thinking  
Participants: Daisuke Yokomori (Kyushu U.), Gaku Kajimaru (Kyoto City U. of Arts), Tomoko Endo (JSPS-RPD/U. of Tsukuba), Yukinori Kimoto (Kyoto U.), Nick Enfield (U. of Sydney), Sachiko Ide (Emeritus, Japan Women's U.)

ワークショップでのエンフィールド先生の講演要旨:

'The Elements of Human Sociality'. In this talk I will introduce some of the key elements of our distinctly human form of sociality. Many animals have complex social lives, but humans have a unique combination of capacities that form a kind of 'infrastructure' for social life as we know it. I will introduce some of the key elements of this infrastructure for social interaction, with a special focus on 'status', 'enchrony', and 'fission-fusion sociality'.

#### (4) Post-conference 公開講演会

(12月7日(月)14時45分~16時15分 @ 名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール, 語用論学会中部地区研究会との共催)

"The Utility of Meaning - Language is Anthropocentric, Cultural, and Useful"

by Professor Nick Enfield

In this talk I will trace a line of research that has explored ways in which culture and the human perspective permeate the structures of language, from word meanings, to grammar, to patterns of conversation. I will describe some of the questions, methods, and research findings spanning my work over the last two decades, based especially in Southeast Asia, but also in making global linguistic comparisons.

参考: エンフィールド先生 関連サイト:

<http://nickenfield.org>

■研究発表とワークショップの詳細、また各発表の抽象化についてはプログラムと学会HPをご覧ください。書店展示(研究社・ひつじ書房・開拓社・くろしお出版・大阪洋書)もあります。

#### ◆受付について

会員については会員番号による受付をいたし

ます。Newsletterの宛名シールに会員番号を明記しています。その番号をお持ちください。

#### ◆宿泊について

すでに、mailing listでお知らせしましたが、名古屋はこの時期に様々な催しが開催予定のようで、宿泊施設の予約がかなり取りづらくなっているようです。そのため、本年度の年次大会に参加される方、参加を検討されている方は、なるべくお早めに宿泊施設案内サイト

(じゃらん、楽天、booking.com等)や旅行代理店、または宿泊施設へ直接ご連絡、ご予約されることをお勧めいたします(出張パックも含めて)。

本学会事務局ではご宿泊に関するご相談やご予約については、十分な体制が整っていないためご対応はできませんが、昨年度の大会でご協力をいただいたJTB西日本様から、本年度も宿泊の手配にご協力いただけることのご連絡を頂戴しております。

下記、JTB西日本様に、直接、ご連絡いただくことによって、一般申し込みよりも多少優先して予約をいただける、とのこと。お申し込みの際は、「日本語用論学会2016年度年次大会参加者」をお申し出ください。なお、英語での対応も可能とのこと。

株式会社JTB西日本 対応窓口

株式会社JTB西日本 京都支店

担当: 北村恵里(キタムラエリ)・小林義明(コバヤシヨシアキ)

連絡先:

TEL: 075-365-7721 (月~金 09:30~17:30)

FAX: 075-365-7713

E-Mail: [jtbkyoto\\_ei3@west.jtb.jp](mailto:jtbkyoto_ei3@west.jtb.jp)

会員の皆様には、ご不便をおかけいたしますが、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

#### \*\*\*地区研究会コーナー\*\*\*

<九州山口地区研究会より>

[第2回九州山口地区研究会の実施報告]

7月3日(金)、九州大学伊都キャンパスセンターにて語用論と言語教育をテーマにワークショップを開催した。当日は約60名が参加し、英語と日本語で5件の発表があった。(1)横森大輔(九州大学大学院言語文化研究院助教)・遠藤智子(筑波大学人文社会系、日本学術振興会研究員)「発話の重なりによる主体性と認識性の交渉」、(2)Jones, Kimberly (Associate Dean, College of

Humanities, University of Arizona) “Learning from L2 Learners: Pragmatic Competence and Second Language Teaching”, (3) Wolanski, Bartosz (Technical Staff, Faculty of Arts and Science, Kyushu University) “Taboo Language in Japanese and Polish: How It Is Used and Perceived”, (4) 単 艾婷 (タン アイテイ) (九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程)「タイトルの付け方についての一考察：日中の新聞コラムを中心に」、(5) 内田諭 (九州大学大学院言語文化研究院准教授)「連続するイベントに関する辞書記述について：フレーム意味論の観点から」。

このうち、キンバリー氏は、以前、自分の3人の子どもを連れて来日していた折、子どもたちの日本語習得を長期にわたって録音文字化しており、当日の発表は、その膨大なデータを基に、子供たちが日本語を習得した過程を論じるものだった。特に日本語に特徴的な「やり、もらい」の補助動詞、男女間のスタイルの違い、自称や呼称の使い分けを子どもが習得していく際の話は具体的で、語用論的能力をどのように言語教育に生かすべきかを考察したもので、とても興味深かった。本ワークショップは、九州大学『スーパーグローバル大学等事業』による招聘と、同大学院比較社会文化研究院が行う「高度グローバル人材育成プロジェクト」による招聘を含むものだった。(西田光一 記)

### <中部地区研究会より>

中部地区研究会は、エンフィールド先生の「Post-conference 公開講演会」との共催として、12月7日(月)に開催する予定です。詳細は、大会の案内をご覧ください。(北野浩章 記)

#### 《事務局より》

##### ★ 会費納入のお願い

■11月末までに会費の納入をお願いしたく、未納分がおありの方には、振込取扱票をご送付申し上げます。ご協力のほど、よろしく願いいたします。行き違いでご入金済みの場合は、何卒ご容赦ください。

■会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっております。

■年会費は、一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円でございます。

■会費の振込先は以下の通りです。所属機関名のみではなく、ご自身のお名前をお書き添えいただけましたら幸いです。

1. 同封の振替用紙で支払う場合：  
郵便振替口座：00900-3-130378 (ゆうちょ銀行)  
口座名：日本語用論学会  
このほか、次の2・3の振込先もご利用いただけます。
2. 他銀行のATMから振り込む場合：  
ゆうちょ銀行 支店名：099 当座 口座番号：0130378 口座名：日本語用論学会 (ただし、振り込み手数料がかかります。ゆうちょ銀行のATMからも振り込みが可能です)
3. ATMからの銀行振り込み：三井住友銀行 学園前 支店 普通預金 店番号 546 口座番号 3755278 日本語用論学会 長友俊一郎 (ただし、他銀行からは振り込み手数料がかかります)  
(お願い) 2の場合は、事務局会計には、カタカナのお名前しか通知されません。また3の場合は、通常は通知がありません。お手数ですが、振り込みと同時に、事務局会計(長友俊一郎：psj.treasurer\_at\_gmail.com)にお支払の年度とお名前、会員番号、所属、住所(また、所属、住所に変更がある場合も同様)をメールでお知らせいただければ幸いです。

■業者委託によるID・パスワードを利用して、ウェブページによるクレジットカードを利用した振込も可能です。

#### ★大会運営部プロシーディング委員会より

2014年度第17回大会のプロシーディング掲載予定の論文数をご報告いたします。

研究発表(日本語) 22本  
研究発表(英語) 8本  
ワークショップ発表(日本語) 9本  
ポスター発表(日本語) 9本  
ポスター発表(英語) 2本  
シンポジウム(英語) 3本

合計で53本が掲載予定です。

#### ★《新刊・近刊案内》

■『修辞的表現論：認知と言葉の技巧』山梨正明 著 開拓社(定価1,900円+税)

本書は、認知言語学的な観点から、日常言語と文学言語の修辞性と創造性の問題を、文法を中心とする言葉の形式的な側面だけでなく、言葉の創造的な担い手である表現主体の心的プロセスの諸相との関連で考察していく。これまでの言語研究の閉塞性を打破し、認知科学の関連分野に新たな研究の方向を示す。また、知のメカニズムの解明に関わる認知科学の関連領域の研究

に重要な知見を提供する。

■『手続き的意味論：談話連結語の意味論と語用論』武内道子著 ひつじ書房(定価 7,800 円＋税)

関連性理論は、語用論を解釈の学ではなく、認知科学として位置づけた。本書は、この認知語用論の枠組みによって、言語表現には、発話の命題内容に寄与するのではなく、解釈の方向を開き手に指示する意味に特化している言語表現があることを示し、新しい意味論を提示する。日本語の談話連結語に例を求め、発話の命題内容ではなく、その解釈過程にいかなる制約を課すかという意味を論証している。著者の 20 年におよぶ研究の集大成である。

■『ひつじ意味論講座 第 7 巻 意味の社会性』澤田治美(編) ひつじ書房(定価 3,200 円＋税)

言語学のほか、様々な分野の第一線の研究者によるあらたな「意味」研究のシリーズ「ひつじ意味論講座」第 7 巻。意味は、社会の様々な場においてどのように伝達されているのか。本巻では、翻訳、医療、司法、スポーツなどにおける言語使用を通して、意味とコミュニケーションをめぐる問題に光を当て、従来の意味論の枠を超えた新しい考察を展開する。講座総目次・総索引付。

■『メタ表示と語用論』東森勲(編) 中島信夫・五十嵐海理・東森勲(著) 開拓社(定価 3,024 円(税込))

本書は、メタ表示に関わる言語現象を語用論の 3 分野、発話行為条件文、否定(否認)、英語ジョークから研究したものである。「表示の表示」とは、どのような言語現象に現れるかを、できるだけわかりやすく解説したもので、人間固有のメタ表示能力解明につながることを期待される。

■『言語理論としての語用論— 入門から総論まで』今井邦彦(著) 開拓社(定価 2,052 円(税込))

関連性理論・言語行為理論・グライス理論・新グライス派・認知言語学という 5 つの語用論理論に亘って、その特徴を適切に記述し、相互の差異を明らかにし、そのうちのあるものについては鋭い批判を加えている。語用論の入門者にとっても、専門家にとっても、自分の研究を進める上での至上のガイドラインである。その語り口は平易であり、処々に散りばめられたコラムは笑いを誘う。

■『意味論キーターム事典』M. Lynne Murphy Anu Koskela(著) 今井邦彦(監訳) 岡田聡宏・井門亮・松崎由貴(訳) 開拓社(定価 3,888 円(税込))

「意味論に興味はあるが、論理学の概念や記号が苦手だ」という初学者が、この事典で例えば Proposition という項目を引くと、本書の特徴である綿密で周到なクロス・レファレンスを通じ、Predicate logic、Logical operator などの項目に導かれ、たちどころに“論理学の通(つう)”になれる。一方、高度な研究者は、本書を、極めて多くの新概念・新思考法への跳躍台として活用できる。Chomsky、Lakoff を初めとする約 20 人の学者に関する論評も貴重である。

■『共生の言語学: 持続可能な社会をめざして』村田和代(編) ひつじ書房(定価 3400 円＋税)

言語・コミュニケーション研究は、持続可能な社会の構築にどのように貢献できるのか。本書は、この課題に取り組む実践的な言語・コミュニケーション研究の報告に、医療・福祉・政策・環境分野からの視点を加えた論文集である。分野を超えた対話を通して、持続可能な社会・共生と言語・コミュニケーション研究を考えるための一冊。

■ *Pragmatics and the English Language (Perspectives on the English Language)*. Jonathan Culpeper and Michael Haugh(著) Palgrave Macmillan

How do we interpret language and expose its meanings? How does pragmatics describe the English language? Where can we go to acquire a deeper understanding of pragmatics? Pragmatics and the English Language is a bold new textbook that presents an innovative and exciting way of looking at the subject. This new perspective, called integrative pragmatics, steers a course between what have historically been considered irreconcilable perspectives. With an emphasis on empirical data, the book is filled with examples from cartoons, films and historical sources, as well as face-to-face and digitally-mediated interactions, all of which are used to help the reader develop a better understanding of the theory. Pragmatics and the English Language: - Focuses on both the pragmatic aspects of English and how pragmatics is shaped by English - Synthesizes traditional ideas with state-of-the-art pragmatics research - Goes far beyond the coverage found in other pragmatics textbooks Shedding light on the English language in highly original ways, Pragmatics and the English Language is essential reading for advanced students of the English language and

linguistics, along with anybody else who wishes to develop a more in-depth knowledge of pragmatics.

■*The Cambridge Handbook of Pragmatics*. Keith Allan, Kasia M. Jaszczolt(編) Cambridge University Press.

Pragmatics is the study of human communication: the choices speakers make to express their intended meaning and the kinds of inferences that hearers draw from an utterance in the context of its use. This Handbook surveys pragmatics from different perspectives, presenting the main theories in pragmatic research, incorporating seminal research as well as cutting-edge solutions. It addresses questions of rational and empirical research methods, what counts as an adequate and successful pragmatic theory, and how to go about answering problems raised in pragmatic theory. In the fast-developing field of pragmatics, this Handbook fills the gap in the market for a one-stop resource to the wide scope of today's research and the intricacy of the many theoretical debates. It is an authoritative guide for graduate students and researchers with its focus on the areas and theories that will mark progress in pragmatic research in the future.

■*Grammar in Everyday Talk: Building Responsive Actions*. Sandra A. Thompson, Barbara A. Fox, Elizabeth Couper-Kuhlen (著) Cambridge University Press.

Drawing on everyday telephone and video interactions, this book surveys how English speakers use grammar to formulate responses in ordinary conversation. The authors show that speakers build their responses in a variety of ways: the responses can be longer or shorter, repetitive or not, and can be uttered with different intonational 'melodies'. Focusing on four sequence types: responses to questions ('What time are we leaving?' - 'Seven'), responses to informings ('The May Company are sure having a big sale' - 'Are they?'), responses to assessments ('Track walking is so boring. Even with headphones' - 'It is'), and responses to requests ('Please don't tell Adeline' - 'Oh no I won't say anything'), they argue that an interactional approach holds the key to explaining why some types of utterances in English conversation seem to have something 'missing' and others seem overly wordy.

■*Negation and Polarity: Experimental Perspectives*. Pierre Larrivée and Chungmin Lee (編) Springer

This volume offers insights on experimental and empirical research in theoretical linguistic issues of negation and polarity, focusing on how negation is marked and how negative polarity is emphatic and how it interacts with double negation. Metalinguistic negation and neg-raising are also explored in the

volume. Leading specialists in the field present novel ideas by employing various experimental methods in felicity judgments, eye tracking, self-paced readings, prosody and ERP. Particular attention is given to extensive crosslinguistic data from French, Catalan and Korean along with analyses using semantic and pragmatic methods, corpus linguistics, diachronic perspectives and longitudinal acquisitional studies as well as signed and gestural negation. Each contribution is situated with regards to major previous studies, thereby offering readers insights on the current state of the art in research on negation and negative polarity, highlighting how theory and data together contributes to the understanding of cognition and mind.

(運営委員会委員をはじめとする会員諸氏からの情報をもとに作成しました。紹介文は出版社によるものを利用しています。)

~~~~~

#### ～編集後記～

\* 秋も深まり、美味しい食べ物がたくさん出回ってきておりますが、兼業主婦としては野菜の高値に頭が痛いこの頃です。会員の皆様には、『読書の秋』でしょうか、お元気でご活躍のことと拝察いたします。

\* Newsletter 34 号には、今年度の大会のご案内をさせて頂いております。今年は、初めて名古屋での開催となり、2 日間の大会と、その前後それぞれワークショップと公開講演があり、とても充実した 4 日間となっております。

\* さて、名古屋と言えば、「きしめん」「ういろう」「味噌煮込みうどん」「ひつまぶし」などなど美味しいものがたくさんありますよね(また『食欲の秋』の話になってしまいました...)。もちろん、名所旧跡も多々あります!! というわけで、大勢の会員の方々のご参加を心待ちにしております (鈴木光代 記)

#### [広報委員]

\* 委員長：田中廣明

\* Newsletter 編集担当：

鈴木光代、北野浩章、堀田秀吾